

遠い先 を 見る目

微な音 を 聞く耳

茨の道 を 拓く魂 (こころ)

加えるに

己を責めるの努力

東大蹴球部の人達は、いつも、全身に全霊を打ち込んで正しい道、新しい道、を切り開いて来た。

十一人集めるのがやっと、という時代に思い切って四校リーグの形を確立し、それを実行した。自分の学校にグラウンドも無いのに全国に呼び掛けて、高等学校選手権大会を決定した。

コレッジリーグ・大学連盟と歴史は変遷しても東大六年連続優勝の輝かしい偉業はいまだ誰れにも破られていない。東大第二軍であるL Bチームによって全日本選手権を獲得し、天皇杯の前身であるFA杯を手に入れている写真を仰ぐのも痛快だ。

毎年正月、霜を分け、氷を踏んで高校大会を運営した事は、満天下の青年を感激させ、幾多名選手を輩出し、日本の蹴球界に寄与した事に計り知るべからずと行って過言でない。

こうした貴重な部史が、今日まで、一本にまとまっていなかったのは、寧ろ、不思議でさえあったが、時来り、機熟して、ここに、部誌が作製されたことは、洵に、洵に、喜ばしいことである。

然し、まだまだ、十分材料が揃ったという訳けではないので、横の連絡を密にして、もっと、完全な、面白い、ものに仕上げて行きたいと願っている。

記録が残っているなら、それは、記憶よりも価値の高い資料であり、自慢話を披露してもらえらるなら、時代背景も知れて意義があり、批判、攻撃も亦、将来への発展上に欠かすことのできぬ鞭だと思われる。

どうか、此の一本を手はじめとして、部誌がいよいよ花やかな実のあるものに育ってゆくよう、大方皆々様の御協力を願いたい。

(昭三八、一二、一八)

新田純興)